# 豊かな人間性と社会性を育む体験活動「ケーナ探検隊」
## ～活動の場を地域に求め、人とのかかわりを通して～

福島県伊達郡川俣町立川俣小学校

はじめに

川俣町は阿武隈高地の北部に位置し、穏やかな丘陵地帯にあり、里山に囲まれた緑豊かな町である。かつては桑畑が広がり養蚕業が盛んで、「川俣羽二重」は、輸出品として全国的に有名であった。近年、養蚕業の衰退とともに機業場の縮小や廃業のため、「かいこ」を見たこともない子どもが増えるなどの変化も見られるようになってきている。

一方、文化面では南米アルゼンチン・コスキン市と親交を結び、南米音楽フォルクローレが盛んで、毎年開かれる町主催のフォルクローレ音楽祭（「コスキン・エン・ハポン」）には、国内各地から多くの参加があり、音楽への関心が高まっている。

このように川俣町は人と人との豊かなかかわりが今も残っており、子どもたちが社会性を培い、自己を確立していくためにふさわしい地域である。

川俣町の小学校８校、中学校２校、高等学校１校は、子どもたちを育んでいる地域を体験活動の場とし、地域の人々とのかかわりを通して、豊かな人間性と社会性を育んでいきたいと考えている。

１　豊かな体験活動取り組みの視点

町では「豊かな体験活動推進地域協議会」を中心とし、各学校では学校支援委員会の協力を得て、４つの視点を共通に確認し、事業を推進している。

視点１　「人とのかかわり」を大切にする。

様々な職場や地域で活動している人なども含め、学校という環境だけでは実現できない人とのかかわりを通し、自分を振り返り、人とのかかわりの中で育まれている自分に気づくことができるようにする。

視点２　活動の連続を大切にする。

体験活動は活動そのものが目的であり、手段である。そのため試行錯誤や失敗も伴う。また、体験は生活に結びついていることに意味がある。体験活動は「生きる体験」である。生活の全てを自分で行い、自分で考えて実行する「活動の連続」が大切となってくる。そして、活動の連続によって内在する苦労や知恵に気づくことができるようになる。

視点３　知の総合化のための学び方を大切にする。

体験活動は各教科、道徳、特別活動などで培われた能力を総合的に生かすことのできる場であり、知の総合化の要素である学び方を活動のねらいとする。

ここでの学び方は知識などの記憶だけに頼るものではなく、体験を通して知恵を獲得する過程で、他にどう働きかけ、自分の思いを伝えるか、どう自分を律し、行動すればよいかなど、人とのかかわりを中心にした学び方を大切にする。

視点４　必然性のある問題意識を紡ぎだす。

問題意識が活動の前にあるとは限らない。活動する中で人とのかかわりの中から子どもにとって必然的に解決する必要が生じる問題が生まれ、主体的な活動が展開されるようになる。その問題意識を的確にとらえ、自覚させながら顕在化していく。

２　本校の取り組み

本校では各学年ごとにテーマを設定し、地域の特色を生かした取り組みをしているが、ここでは第４学年の「ケーナ探検隊」を紹介する。

(1)　活動のねらい

①　活動の意義

中南米楽器ケーナに親しみ、合奏する喜びを味わうとともに中南米の民族音楽フォルクローレやフォルクローレ音楽祭（「コスキン・エン・ハポン」）の歴史について調べ、川俣町とアルゼンチン国の親交について学ぶとともに、「ケーナ」や「チャランゴ」などの中南米楽器の演奏方法を地域の音楽家から教わり、友達との合奏や発表会を通して多くの人とかかわり、その中で生まれ育っている自分自身に気づかせる。

②　人とのかかわり

ゲストテイチャーからケーナの演奏方法を学んだり、中南米の生活に詳しい地域の人から服装や藍染めの方法を教わったりしながら、さまざまな人とのかかわりを体験する。

③　活動の連続性

ケーナの演奏方法を教わり、発表できるようになるまで繰り返し練習し、さまざまな場での発表を経験する。ケーナの音を出すことから始まり、発表活動ができるまでの連続性を大切にする。

④　知の総合化としての学び方

ケーナの演奏方法を学び、音を出す「こつ」をつかむ。身近な材料を使って楽器を製作し、楽器の仕組みについて知る。音を出す苦労と音が出たときの喜びを通して多くの知恵を知り、人とかかわるすばらしさを感得する。

⑤　必然性のある問題意識

多くの人に自分たちの演奏を聞いてもらいたいという願いを持ったり、楽器を実際に自分で作ってみたい、南米の文化について知りたいという問題意識を持ったりして積極的に行動する。

(2)　活動の実際　　（総時数５４時間　課外４時間）（１日行事は５時間に換算）

| 活動内容 | 月・時間<br>教科領域 | 人とのかかわり | 学び方 |
|---|---|---|---|
| ○中南米音楽フォルクローレに関心を持つ。<br>○中南米楽器ケーナの演奏を覚える。<br>・ケーナの演奏を聞き、自分も演奏できるようになりたいという願いを持つ。<br>・音が出るように練習する。<br>・簡単な曲を演奏する。<br>・演奏できるようになった喜びを味わう。<br>・演奏を聴いてもらいた | ５月～<br>７月<br>(13)<br>総合 | ○講師の先生からケーナ演奏の基礎を教えてもらう。<br>○自分の音の出し方を先生に見てもらう。<br>○謙虚な態度で指導を受ける。<br>○お互いに協力して教えあう。<br>○全体の調和をとらえ、自分の演奏の強さやテンポを調節する。 | ○ケーナの音色を注意深く聞き取る。<br>○音が出るまで試行錯誤を繰り返す。<br>○音が出るときのケーナと唇の角度、息の吹き込み方などの「こつ」をつかむ。<br>○上手な友達の演奏について唇のあて方など分析的に観察する。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| いという願いを持つ。 | | | |
| ○ケーナ合奏を他の人に聴いてもらう。<br>・発表の場を考える。<br>・みんなで演奏できる曲を選曲する。<br>・発表のための準備や手順について話し合う。<br>・発表にふさわしい衣装を準備する。<br><br>○「コスキン・エン・ハポン」に参加し、中南米音楽を愛する多くの人がいることに気づく。<br>○町音楽祭でケーナ演奏を通して、他の学校の友達と交流する。 | ８月～１０月<br>(16)<br>総合<br><br>（４）<br>課外<br><br>(4)<br>行事 | ○発表の場を考えることで地域で多くの人とかかわっていることに気づく。<br>○演奏を聴いてもらう人たちを意識し、目的を持って取り組む。<br>・校内での発表(児童対象)<br>・「コスキン・エン・ハポン」での発表（地域の方方対象）<br>・学習発表会（家族・地域の方々対象）<br>・「出前学習発表会」（学校や公民館に来られない方々対象）<br>○「コスキン・エン・ハポン」に出場するには、チーム名が必要とのことから、名称を考える。<br>○川俣町でケーナなどの音楽に取り組む同学年の友達がいることに気づく。 | ○発表の場をふまえた演奏計画に基づき練習内容を調整する。<br>○他の人の演奏を真剣に聴く。 |
| ○中南米の音楽や服装、食生活について調べる。<br>・図書<br>・インターネットの活用<br>・インタビュー<br><br>○中南米の楽器を身近な素材で作る。 | １０月～１１月<br>(11)<br>総合 | ○中南米に詳しい人や実際に住んだことがある人の話を聞く。<br>・地域のフォルクローレ演奏家<br>・ホテルでの中南米料理<br>○工夫して楽器を作る。<br>・塩ビ管でケーナを作る。<br>・バケツに布テープを貼ってボンボを作る。 | ○質問事項を明確にしてインタビューをする。<br><br>○まねることを通して工夫や苦労など知恵に気づく。 |
| ○ケーナ演奏を老人ホームのお年寄りに聴いてもらうボランティア活動を計画する。<br>○老人ホームを訪れ、演奏する。<br>・ケーナを演奏する。<br>・お年寄りと交流する。 | １１月<br>(5)<br>総合 | ○相手に合わせた計画を立てるために事前の話し合いをする。<br>○お年寄りに喜んでもらえるための企画について話し合う。<br>・お年寄りに分かりやすい説明を考える。<br>○お年寄りと話し合う。 | ○適切な質問をする。<br><br>○他人の視点で考える。<br>○練習しながら試行錯誤を繰り返し、理想とする演奏に近づける。 |
| | | | |

| | | | |
|---|---|---|---|
| ○学習発表会で家族や地域の人たちに演奏を聴いてもらい、調べたことを発表する。 | １１月（１日）行事 | ○家族や地域の人から感想を聴く。 | ○自分の行動を振り返り、今後の活動に生かす。 |

(3)　成果と課題

①　ケーナの演奏ができるようになることを通して、ケーナの素朴な音色を体感し、友達と合奏する喜びを味わうことができた。

　子どもたちの感想を追ってみると、ケーナの音が出ないときに「本当にこんな楽器で音がでるのか」「どうしても音が出ない」と不安を感じていたのが、休み時間にも音が出るまで練習を繰り返し、音が出るようになって「気楽になった」「ほっとした」から「練習したかいがあった」と達成感を抱き、友達と音を合わせることができるようになると、「コスキン・エン・ハポンにも出るぞ」と合奏する喜びと発表の意欲を抱くようになった。数々の発表の場を終えると、「みんな喜んでくれてうれしかった」「ケーナが好きになった」と自己有用感の高まりが見られた。

②　ケーナが吹けるようになるために、ゲストティーチャーに教わったり、友達と助け合ったりするなかで心地よい人とのかかわり方を学ぶことができた。また、スカーフなどの舞台衣装を藍染めする方法を地域の方などに教わりながら、ＰＴＡ学年行事として親子で取り組んだ。さらに、中南米に詳しい地域の方から中南米の服装や生活の様子、音楽、料理について教えていただいたりした。このように地域の多くの人とかかわるなかで、学校だけでは学ぶことのできない貴重な体験をすることができた。

③　ケーナが吹けるようになり、友達と合奏できるようになった喜びから、学校以外の人たちにも聴いてもらいたいという願いが広がった。

　さらに、地域のお年寄りにもぜひ聞いてもらいたいとう思いから特別養護老人ホームを訪れるなど、子どもにとって必然性のある問題意識が生まれ、ボランティア体験活動への広がりが見られた。

④　さまざまな場での活動を経験しながら、どんな場でどんな人に聞いてもうらうかという目的意識と相手意識を持ち、衣装や曲目、演奏順序、交流も考えることができるようになった。

⑤　体験活動が展開される中で「はっとした」「こんなことがあったのか」「不思議だ」などの驚きを素直に表現する「感じる心」が育つとともに、「今度はこんなことをしたい。」「みんなといっしょに活動したい。」など目的を持って行動する姿が見られるようになった。

⑥　衣装作りや調べ学習にも多くの時数を確保することが必要である。

おわりに

　平成１４年１２月２４日に行われた第３回「川俣町豊かな体験活動推進地域協議会」では、小・中・高校から地域の特性を生かし、各発達段階を踏まえた取り組みが数多く紹介された。今後、学校相互の連携を一層図りながら、地域として豊かな人間性・社会性を育くむための体験活動に取り組んでいきたい。